

第二研究会開催のお知らせ

ガーナ共和国の在来家畜と 我々の取り組みについて

～大型齧歯類飼育プロジェクトと在来家畜のクラミジア保有状況調査を中心に～

大屋 賢司 先生

岐阜大学 応用生物科学部 獣医微生物学分野

日時：平成 28 年 4 月 20 日（水）

15:30 - 17:00

場所：日本生物科学研究所 管理棟 会議室 2・3

【要旨】

西アフリカのガーナ共和国は、ギニア湾沿岸の熱帯雨林から北部のサヘルまで地理的多様性が大きく、そこに生息する動物も多様である。沿岸部の首都アクラは、人口200万人を越える西アフリカの中心都市であるが、北部地域は気候が厳しいこともあり、畜産は盛んでなく、動物性蛋白質の供給は不安定である。そのため、栄養不足が深刻であり、動物性蛋白質の摂取は年に数回という地域もある。

ガーナの畜産は、他の東、南アフリカ諸国に比べると盛んではなく、家畜疾病に関する情報も整備されているとは言い難い。飼育様式も集約的なものではなく、在来家畜の粗放的飼育が主体である。在来家畜は、地域の気候や特性（感染抵抗性など）に適応しているが、概して生産性は低く、食用家畜として優れているとは言い難い。

我々は、学術的興味に加え、ガーナの家畜衛生向上へ貢献したいとの思いから、数年前より調査研究に参入している。今回の第二研究会では、同国の畜産の現状と、以下の取り組みを中心に紹介させていただく。今後の展望も含めご助言等いただければ幸いである。

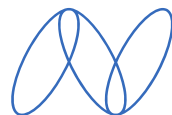
1) 大型齧歯類の飼育プロジェクト

グラスカッター（ケーンラット）はサブハラ原産の大型の齧歯類であり、その肉は地

域住民に非常に好まれている。消費の多くは狩猟によるが、飼育もされており、この地域に独特の在来家畜であるといえる。現在、このグラスカッターの飼育普及を行うことにより食糧向上支援を行うプロジェクトが進行中である（JICA草の根技術協力事業「在来家畜生産の効率化によるガーナの食糧事情向上支援」）。コンベンショナルな手法やメタゲノム解析による、衛生学的知見など活動の一端をご紹介します。

2) 在来家畜のクラミジア保有状況

偏性細胞内寄生性細菌であるクラミジアは、多様な宿主域、病態を示す。人獣共通感染症や家畜の流産の原因となるなど獣医学領域においても重要な菌種が多い。上記プロジェクトに参加する過程で、内陸部のアフアジャト山麓において、10コンパウンド（居住空間）程からなる小さな集落で飼育されている家畜および周辺の野鳥のクラミジア保有状況を調査する機会を得た。極めて狭いエリアで少なくとも4菌種のクラミジアを検出し、多様なクラミジアが混在する貴重なフィールドを見つけたことができた。このフィールドでの調査が可能となった経緯についてもあわせてご紹介する。



主催

一般財団法人 日本生物科学研究所

NIBS <http://nibs.lin.gr.jp/>